

『恋路ゆかしき大将』の主題

——三人の貴公子と雛屋の役割から——

赤松里佳

はじめに

『恋路ゆかしき大将』は、全五巻からなる中世王朝物語で、巻四に欠落があり、『風葉和歌集』に入集していないことから、成立は『風葉和歌集』成立以後かつ室町時代前期であると考えられる。⁽¹⁾ 作者は撰閲家である飛鳥井雅有が想定されたが、傍証できる史料がないため、現時点では不明とされている。⁽²⁾

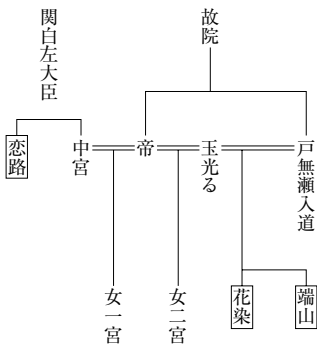
本作品は、恋路、端山の繁り（以下、端山）、花染の三人の貴公子を主軸として、親や女性といった様々な人物との関係や恋愛を描いた約八年に及ぶ物語である。このような特徴から、『中世王朝物語全集』において、「三人の貴公子が最愛の伴侶を見つけるまでの物語」と評価されている。⁽³⁾ 三人は伴侶を見つけないという同じ目標のもとで行動しているように描かれながら、帝や吉野致仕大臣による不本意な女性の手引きや伴侶との関係悪化による義母の執拗な介入など、特に女性関係での問題においてその人間関係は錯綜し、各人が個性を際立たせている。

先行研究では、『源氏物語』等の先行作品の摂取、中世王朝物語に内在する〈家〉の問題を他作品と共に論じるものが多く、登場人

物に焦点を絞った研究は主とされてこなかった。

本稿では、本作品の三人の貴公子が担う役割を起点として、主人公の男性を三人とする極めて珍しい設定を持った作品がなぜ成立し、どのような効果と影響があったのかに着目し、その主題に迫りたい。なお、本文の引用、巻数、及び頁数は『中世王朝物語全集8 恋路ゆかしき大将 山路の露』（笠間書院 二〇〇四）を使用した。なお、引用文中の傍線・その他は全て私に付したものである。

【人物関係図二】



一 男色による支配と調和

本作品には、帝や端山・花染といった男性たちが恋路と戯れる場面が随所に描かれているが、それは以下に示すように親愛の情というより男色を想起させる描写である。このような男色描写は、帝による軋轢を生じさせるものと貴公子による調和をもたらしものに分類される。

帝は、入内予定であった玉光を弟・戸無瀬入道に盗まれた過去がある。戸無瀬入道の出家後に玉光は帝の妻となるが、彼女は変わらず戸無瀬入道に想いを寄せている。このような事情から、天皇という立場でありながら、周囲を支配しきれない劣等感を抱き、その劣等感の矛先が恋路へと向かうのだ。

上は、中におとなびさせ給へれど、この大殿を思ひまたはすさま、けしからぬまでにて、世人もやう変はりたる楊貴妃にたとへてぞ申しける。
(卷一・一九頁)

帝が恋路を「けしからぬまでに」寵愛する様子は周囲の者たちにかの玄宗皇帝が楊貴妃に夢中になり、唐の国を傾けるほどの寵愛ぶりであったことに喩えられる。男色関係を結ぶ思惑としては、上村一実氏が

男色とは支配・被支配関係が恒常化し二人の間に主従関係が芽生え、情によってつながってくることに意味がある。

と指摘するように⁴⁾、天皇家の権力を摂関家の恋路に振りかざす意図があつたと考えられる。帝は恋路と男色関係を持ったことをきっかけに自身の妃など女性を次々に差し出すが、これも恋路を自らの支配下に置くための行動と考えられるだろう。

これに対して三人の貴公子の描写は、花染が恋路の手に体を密着させてすがりつくなど、主従関係による支配ではなく、むしろ友情や愛情の延長としての男色が読みとれる。

①この中将たちとりわき御仲よくて、遊び明かし給ふ夜な夜な多く、艶なる事の例しにしつべく、いとをかしき御さまどもなり。
(卷一・一八頁)

②喜び給ひて、やがて数珠持ちて念ずし給ふ御手にひしめき取り付き給ふを、心づきながり戯れ給へる、いとをかし。
(卷一・三三頁)

③げに女の一度も見そめ給ひぬるが、かく心を迷はし、泣き焦がるるもことわりならんと、今更うちまもりもきこえ給ひつつ
(卷二・七一頁)

帝との男色では中宮より恋路に愛情が深いことを「やう変はりたる楊貴妃」と皮肉めいて語るのだが、三人の貴公子については、波線部に「いとをかし」とあるように微笑ましいものと認識されている。特に、②③の花染から恋路に向けられる視線は「うちまもりきこえ給ひつつ」からも友情を超越した情愛であるといえ、このよう

この恋路・女二宮夫妻の関係は、懸想した天皇の妻に似た容姿の幼女を垣間見し、妻とする点が「若紫」巻を想起させ、女二宮の容姿、新枕の場面も幼い紫の上と一致する。紫の上は光源氏から愛されたが、子どもに恵まれない苦悩があった。また、結婚までの過程は、「宿木」巻で帝が女二宮を薫に降嫁させたことと重なる。薫は表面上この妻を大切にしているが、特別寵愛することはなかった。一方、本作品の女二宮は、恋路から格別の寵愛を受け、子どもを三人出産し、妻として絶対的な地位を確立した。女二宮が直面するはずの妻としての苦悩を、『源氏物語』の展開をいわば反転することで回避する形になっているのである。

女性を板挟みとした三角関係においても、貴公子たちの調和が描かれる。

まず、恋路が花染の恋人である吉野三君にあてた恋文を花染が発見する場面である。これは『源氏物語』の柏木が女三宮にあてた恋文を光源氏が発見する場面を踏まえており、『源氏物語』では、その後女三宮は出家し、光源氏への罪悪感による心痛で柏木は病死するという悲劇的展開になる。対して本作品は、吉野三君は出家するものの、そもそも花染は恋路に憤っていないなかったため、花染は恋路の恋文、恋路は吉野三君の恋文を見せ合いながら大笑いをして事態は収束する。言うまでもなく、恋路・花染の関係は良好のままである。(人物関係図二)参照)

続いて、梅津女君が恋人である花染と勘違いして、恋路と関係を持つ場面である。これは、宇治に身を置いていた際に薫と匂宮の三角関係による対立により板挟みになった浮舟を彷彿とさせる。浮舟は、心痛により入水自殺を図るが、当該場面においても、先の女性

略奪場面同様、恋路と花染は対立関係にならず、複数の男性と関係を持った梅津女君もまた、自殺はもとより気を病むことさえない。

(人物関係図三)参照)

『源氏物語』から登場人物の苦悩や悲劇的な展開が描かれた場面が摂取されているものの、それらは意識的に拍子抜けするほど穏やかな様子へと反転されている。女性が関わる場面であっても、結果的には貴公子、とりわけ恋路と花染は、揺るがない関係であることが読みとれるのである。

三 主人公としての貴公子たちの役割

主人公格の人物を並立させるのは『源氏物語』の薫と匂宮をはじめとする先行作品にも例があるが、主人公格を三人も擁立する例は珍しい。多くの共通点を持つ彼らは、行動を共にする様子が見られる。

彼らの共通点は、和歌からその呼び名がつき、その名が各人の性格形成に関わる点、戸無瀬入道のもとに足繫く通う点、吉野致仕大臣の三姉妹と関係を結ぶ点である。とりわけ恋路と端山は、伴侶との関係の悪化をはじめとする女性関係の相談で戸無瀬入道のもとに行き、本心では望まない結婚相手・吉野致仕大臣の娘を妻としたことも共通する。対して、花染は三人の中で最も描写が少なく、自身の恋愛で苦しむこともないため戸無瀬入道の元を訪れる必要がない。そもそも結婚にも消極的で他の二人とは性質を異とする。本作品が「三人の貴公子が最愛の伴侶を見つけるまでの物語」であるならば、花染は「恋路ゆかしき」主人公として、最も不可解な存在である。対立関係にならずに共存する三人の主人公格は、どのように棲み分

けをしているのであろうか。

まず、「恋路ゆかしき」主人公として自身の恋愛に積極的に邁進する恋路と端山を比較する。本作品の主人公としてはどちらが相応しいのか、そもそも主人公に必要な要素は何かという視点で二人の役割を考えてみたい。

次に示すのは、恋路の独詠歌である。

しるべある雲の懸け橋踏みもせず恋路ゆかしきわが心かな

(巻一・二八頁)

作品名を和歌の一部からとる手法は、『いはでしのぶ』『しづくに濁る』『我が身にたどる姫君』『風に紅葉』『やへむぐら』など中世王朝物語では、しばしば見受けられるものである。作品名ばかりでなく人物の名称にも使用されている点から、主人公は恋路である可能性が高い。

第二に、物語における三人の貴公子の登場する順番から、主人公が恋路であることが証明できる。長谷川政春氏は、『石清水物語』を例に、

この物語は、「春の少将、秋の侍従」と並称された二人主人公の物語のように語りだされ、とりわけ秋の侍従は「御かたち美しく、この世の人とも見えぬ」超越性を有して登場してくる。それはまさに主人公にふさわしい登場であった。主人公の紹介、あるいは両親の紹介からはじまる従来の物語からみて、そのように読める。しかし、なぜか真の男主人公は、それより遅れて

登場してくる。つまり別人の伊予守であった。

と述べているように、「真の主人公」は主人公格の男性の後から登場することがしばしばある。『源氏物語』『匂兵部卿』巻で、夕霧は光源氏に容姿は似ているが父のような色好みではないと紹介してから、薫・匂宮の貴公子としての評判の高さに話を移行させることも想起されよう。本作品では、端山・花染兄弟が登場した後、戸無瀬入道隱遁の契機、端山・花染の生い立ちが語られたのち、恋路の登場となることから、三人の貴公子の中で最後に紹介があった恋路は主人公といえそうである。

では、主人公として恋路が端山に劣る点は何か。

はかなき琴笛の調べはさる事にて、まことしき御才のかしこく、
今より世を治め給はんに誤りあるまじう、四海の主と言はぬに
著く見えて、もて鎮め給へる心恥づかしさの身にしむばかりな
る…… (巻一・一六頁)

あながち何とすぐれて光り輝ねど、ただこの人の御心の底には
いかなることか思さるらむと、そぞろにおほつかうもあり。
(巻一・一七頁)

とあるように、恋路は管弦や政治統率力に長け、周囲からの信頼も厚いが、容姿は格別優れているわけではない。一方の端山は、

心恥づかしげになまめかしきをもととして、匂ひも光も言ひ知

とあり、母・玉光るの血を継ぐ美しい容姿の持ち主である。「源氏物語」の光源氏からも分かるように、主人公像として「光」の要素は不可欠である。加えて、端山には「匂ひ」の要素を持っており、薫や匂宮までも彷彿とさせられる。そのため、容姿の面からは端山が恋路を圧倒し、主人公として相応しい。

第三に、物語の中核となる伴侶を見つけた後の様子である。恋路の独詠歌からも推察できる通り、貴公子たちにとって最愛の伴侶を見つけることは最大目標のように描かれている。

恋路は女二宮という伴侶を見つけてから、巻五において出来心により梅津女君と一度関係を持つが、伴侶・女二宮の魅力を再確認し、不貞を後悔する。これを契機に、恋路は安定した夫婦生活を送ることになるが、物語の構成としては変化がなく停滞気味である。

一方の端山は、当初より女一宮との結婚を義母・中宮により反対されており、結婚後は梅津女君との逢瀬が原因で中宮に女一宮を取り上げられて、その心痛によって自ら官職を降りることを決意し、戸無瀬院に引きこもり、悲嘆にくれる。梅津女君に懸想した点は恋路と同じだが、女一宮に忍び逢うところが梅津女君との後朝の場面が『いはでしのぶ』の内大臣を下敷きとしているため、読者は女君への想いのあまり死に至る結末を迎えるのではないかと、物語後半で予想することになる。不貞の相手である女性や義母といった親世代によって自身の立場が揺るがされるのが、摂関家の恋路ではなく皇統の端山である点に着目すべきである。皇統にありながら一度表舞台から追放されそうになるという端山の地盤の弱さは、天皇の権

力が衰退してきた両統迭立の時代背景を反映したものと見えよう。

作品名の通り、自らの「恋路」を探し、伴侶を見つけることをいち早く実現したのは恋路であり、伴侶に対しても比較的気苦労を掛けない人物であるため、この物語における主人公としては相応しい。ただ、恋路の容姿や物語後半における安定による停滞は主人公としての欠陥であるともいえる。美しい容姿と伴侶を奪われた悲嘆の描写がある端山もまた、恋路にはない主人公としての要素を共有していると考えられるのである。

それでは、花染はどのような役割を担っているのだろうか。

かやうにいづ方も、恋路ゆかしき世の習ひにて思ふ事なきに、かの花染は、移ろふ色のみほどなくて、まことに染むる心もなし。

他の二人とは違って伴侶を求めているため、場当たりに女性を次々に変える花染は、父である戸無瀬入道が法輪寺参詣で三人に経文の説明をした際も一人、「前栽の中にまじりて、花をもてあつかひ給ひける」(巻一・四〇頁)という様子で興味関心のないことに対しては冷淡である。その一方、後述のように鋭い洞察力の持ち主でもある。

「はじめ、いかなるも憎からず覚え侍るが、秋風だに吹き立ちぬれば、怨みて泣きたるむつかしき、誇りかなるうるさき、やさしだちたるかはゆさ、上衆めき物知り気色したる憎さ、かたほなるものわびしさ、しめやかにもてつけたるあきたさ、ただ

とあるもかかると暑くらはしく、蘭麝の匂ひの身にしむもの頭痛く、よろづにつけて思ひ許す心が侍らぬ時に、いかなるべしとも覚え侍らぬや」と、口説き続け給ふ……（巻一・三三三頁）

多くの女性と関係を持つが情に流されることはなく、女性のあらゆる性質について辛辣な発言をする花染の冷淡さが読みとれる。彼は、基本的に女性への関心が希薄な人物として造型されている。

うち絶え、今は殿・上にて並びおはするを、飽かぬ御さまかかと見たてまつり給へど、またげに女と生まれなりに、この御心にまたなく思はれたてまつりたらむは、生ける思ひ出にこそあらめ、さはまかなひ置かれたる事なれど、もしまことの御心ざしやいか、未だ見えぬ事をなど、権中納言ぞ、とかく思ひ統ける給へる。（巻一・七五頁）

このように女性への関心が希薄な花染は、一歩引いた視点で鋭い洞察力を発揮する。花染は帝が恋路と女二宮を結婚させようとする場面で、登場人物の中で唯一、帝が女二宮を斡旋することへの思惑を不審がるなど、その場の状況を俯瞰する能力を発揮するのである。恋路と吉野三君の逢瀬が発覚した場面でも、

これゆゑかき絶えんも、片つ方の苦々しくなどやと思されんと、かたはらいたければ（巻一・七二頁）

と、吉野三君との仲を自分に追及されることで恋路の虫の居所が悪

くなるのではないかと案じており、花染の関心は恋人よりむしろ恋路に向けられているといえる。恋路の説得によりそれまで興味のなかった結婚を決意すること、女二宮と花染の妻・帥中納言女が同時期に懐妊することなども花染は、特に恋路と密着した関係にあることが窺える。女二宮の出産の際には、物の怪に動転する恋路に代わり無言の聖を呼び、助けに入る。

また、端山が女一宮を奪われ意気消沈した際は、戸無瀬院で共に修行し、世俗から離れ、戸無瀬院に隠遁しようとする端山を引き留めるために恋路に協力を求めており、二人のために奮闘する花染の姿がしばしば描かれる。

花染が恋路・端山同様に、恋愛に積極的な人物であったなら、恋路は吉野三君との逢瀬が花染が発覚した時点で『源氏物語』の柏木と同様に心痛により逝去し、端山は戸無瀬院に隠遁し、自身の父親である戸無瀬入道と同じ運命をたどる可能性があった。恋路・端山が悲運を回避できたのは、花染の関心が仲間たちにあつたからに他ならない。

花染が頻繁に恋路・端山の窮地に手助けをする様子は、貴族における乳母子の姿が彷彿とさせられる。例えば『源氏物語』の惟光が光源氏と若紫の婚儀の用意をする場面は、花染が恋路・女二宮夫妻の婚儀の準備をする場面に、光源氏須磨退去の際に惟光が帯同したことは、端山が戸無瀬院に籠った際に花染が帯同したことを想起させる。自らの意志で二人が危機的状況に陥った際に助けに入り、仲間への思慕から行動を共にしているので、直接惟光の人物摂取があるとは言い難いが、花染が貴族における乳母子に類似する役割を引き受けていることは確認できるだろう。

恋路・端山には主人公としての素質と不足部分を二分することで主人公像を確立させ、花染は二人が危機に直面した際に、手助けに入り、補完する役割を持つ人物として造型されているのである。

四 雛屋に込められた恋路の願望

卷一において、伴侶を見つけられない恋路は、帝の妻・玉光ると関係を持つよう斡旋される。玉光るに魅力を感じながらも、次のように恋路は帝の妻と関係を結ぶリスクを避け、結局二人が結ばれることはなかった。

まことにかばかりの類はおはせざりけり、すぐれたる御思ひもことわりかな
(卷一・二二頁)

玉光るのような容姿を持つ「世に馴れぬ姫宮」(卷一・二九頁) だったら結ばれたいと思っていた恋路は、後に玉光るの娘・女二宮を伴侶とした。幼い女二宮を垣間見し、その容姿が玉光るを想起させる点は、先述の通り『源氏物語』「若紫」巻を踏まえている。しかし、光源氏には、幼い若紫を理想の女性に仕立て上げたいという願望があるが、恋路は幼い女二宮の今の状態に満足しており、少女への視線が明らかに異なる。『源氏物語』で「生ひ先」「ねびゆかむさま」と将来を思い浮かべる要素があることに対し、恋路は女二宮の懷妊を「ねびゆかむさま」と語り、妻に出産させたくないと思うことから、女二宮に幼い状態のまま置いてほしいという願望があったと推察できるのである。

光源氏は雛遊び、恋路は雛屋の制作によって幼い姫君にアプローチ

子をした。手段は似ているが、その思惑もやはり異なる。

本作品における「雛屋」とは、恋路に垣間見された女二宮が、「あはれ、雛屋に虫のゐよかし。一つにあらば、いかに嬉しからん。」(卷二・五一頁)と話していたのを契機に、女二宮の興味を自身に向けさせるために制作した人形を入れるための小型の家である。

先行作品においては、『源氏物語』明石の君が「いとうつくしげに雛のやうなる御ありさま」(『藤裏葉』)と形容されたことを嚆矢として、「雛」は『狭衣物語』、『栄花物語』等で、少年少女や女性の小柄なさまをあらわす直喩として用いられているが、中でも『源氏物語』と本作品は「雛」が主題に関わる役割を担うと考えられている。¹⁰ 桜井芳徳氏は、『源氏物語』においては「雛遊び」という遊ぶ行為に焦点を当て、共に遊ぶことにより生成される人間関係を描くこと」に重きが置かれ、『恋路ゆかしき大将』では「住処である『雛屋』という小宇宙的な空間へと向けられている」と指摘する。¹¹ すなわち、本作品では女二宮との関係性を深める目的の雛屋制作とは別に、雛屋という空間を制作することに意義があるといえよう。恋路にとって雛屋は、人間関係を形成するものではなく、自身もつ願望や劣等感を表現する、いわば箱庭療法としての役割を果たしているのではないだろうか。

雛屋の場面は、職人を呼び寄せる場面から、恋路が制作に無我夢中になる様子、そして雛屋周辺に制作した自然物の描写、大内裏の様子、そして次々と新たな細工を加えていく場面に筆を費やされ、恋路がいかに雛屋制作に固執しているかが読みとれる。

さてこの写されたる雲の上は、八省・豊楽院などはもの遠く憚

りもありぬべければにや、ただ十六殿・五の舎・中門どもばかりにて、さては京中の名ある所々、北山には雲をふらせ、東山・白川のわたりには春の花を尽くし、鳥羽殿の景気、中島の夏木立涼しくて、淀野のあやめ・真孤草しげく、西には嵯峨野の秋の花、小倉山の鹿の立ち処、紅葉吹き下ろす嵐の山に、名に流れたる大井川、筏の上の落葉、むら濃に見ゆる滝の白糸まで、目もあやなるなかにも、戸無瀬の院を写して、世に超えたる泉水・木立・御堂の飾り、目もあやなるをさながら写されたる：

(巻一・五七頁)

「雛屋」というにはあまりに大がかりであるほど、詳細かつ写實的に、「この写されたる雲の上」と内裏までも作っているが、八省・豊楽院は撰閲家である恋路にとつて「憚りもありぬべければにや」という理由で制作されなかつたと語られている。だが、恋路は王権が掌握できないことを嫌悪し、八省・豊楽院の制作を避けたのではない。

太上天皇と撰録の臣とは、対座にゐるべき事なるを、白河の法皇よりして、その式やぶれにしかど、「今宵はわざとさなんあるべき」と仰せにて、時に臨みて直されたる御座に、殊更揖してゐ給ひぬるほどの御用意、あらまほしくめでたく身にしむばかり見たてまつる人多かり。

(巻一・八〇頁)

右は恋路と女二宮の婚儀の場面である。白河法皇以来行われなくなつてしまつた天皇と「撰録の臣」が向かい合わせとなり座る風習

を復活させたことは、王権の復活を彷彿とさせる。この風習が廃れたのは撰閲政治から院政へと政治形態が変化する中で、撰閲家が天皇を支える役割が果たせなくなったことを意味するのではないか。その形をわざわざ復活させていることには、撰閲家が天皇の下で力もちえた時代への憧憬の念があるだろう。

撰閲家である恋路の願望は、八省・豊楽院を作らなかつた代わりに、戸無瀬院を模した景物を制作した点に顕在化している。帝は戸無瀬入道に「嫁盗み」をされ、当事者の玉光るは帝の妻となつても、戸無瀬入道を想っていることから、劣等感を覚え続ける。帝の支配下にいた恋路は、女二宮と帝・玉光る夫妻への雛屋御覧において、戸無瀬院を見せることは、帝の劣等感を連想させる厭われる行為であることを認識していたはずである。それをあえてやっているのは、男色における支配関係を崩壊させるためであつたと考えられる。

その目論見通り、恋路が雛屋制作を終了した後から帝による女性の手引きや男色を想起させる描写が見られなくなり、彼は帝の束縛から解放される。帝らの執拗な介入から、本格的に三人の貴公子の恋愛描写に重きが置かれるようになるのも、雛屋制作の終了後である。このことから雛屋は、物語が移行するための効果を持つと考えられる。

雛屋は巻二のみに登場し、以後、登場人物に想起されることもない。この後の展開に大きな影響を及ぼすわけではない雛屋をこれほどまでに詳細に描かれているのは、天皇の力が衰退する中、王権への憧憬を持つ者が作品の享受者層にいたために、恋路の願望を通じて王権への憧憬が作品に組み込まれたからに他ならない。

おわりに

本稿では、男色を想起させる描写や『源氏物語』の反転により、本来なら確執が起こる場面が回避され、むしろ三人の貴公子の調和により、強固な関係が構築されていたことを確認した。恋路は伴侶との強固な結束を示す役割、端山は皇統の危うさと回復を示す役割を担い、主人公の相応しさと不相応さを持ち合わせているため、主人公としての役割を二分していた。特筆すべきは二人が、主人公の並立がなされた『源氏物語』の薫と匂宮のように対立関係にはならず、終始良好な関係である点だ。恋路の優れない容姿と物語後半における安定による停滞を、端山の美しい容姿と伴侶を奪われた悲嘆の描写で補うものとして機能する。これは、恋路は巻一と巻四が、端山は巻三と巻五が中心となり、両者の話が同時進行しないように、明確に分けられているという物語の構成からも指摘できる。

花染は、他二人のように伴侶を見つけることを重視せず、主人公としての弱さをもつ二人を貴族における乳母子のように補充する役割を担った。巻五の末尾においては、恋路・端山がともに伴侶との関係が良好で、今後その状態は続いていくことが予感させられ、物語の終結を意味するのに対し、花染は梅津女君に興味を持ち、自分に好意を寄せていないことを嘆いている。恋路・端山両夫妻をかき乱した梅津女君を監視するつもりなのか、それとも単に、恋路の斡旋によって妻となった帥中納言女ではない新たな伴侶への視線なのか、このような花染の言動は読者の想像をかきたてることが想像できる。「次々の巻になんと本に。」(巻五・二一四頁)と余韻を残しつつ、この作品が結末に向かうのは恋路・端山ではなく、巻五の

末尾まで女性を追い続けた花染の存在ゆえである。

女二宮へのアプローチの手段にすぎないと思われた雛屋には、多くの役割が与えられていた。それまで光源氏に模した存在であると考えられていた恋路は、この偏執的な雛屋により幼い姫君への視線が光源氏とは異なることが明らかになった。巻一から続いた男色による支配や恋路にとつて手の届かない王権への憧憬は雛屋に込められたのである。『源氏物語』の悲劇を回避するための摂取によって、中世の時代に王朝物語を求めた本作品の享受者が『源氏物語』の陽の面や隆盛していた王権を懐古したのであると推察する。そして、彼らの想いを投影したものが、恋路の雛屋制作であるともいえよう。以上のような享受者層の背景を踏まえると、本作品における主軸は恋愛描写であることは相違ないが、その中に王権の衰退と復活への願望が男色や雛屋といった形で機能していたのである。「三人の貴公子たちがそれぞれの生涯の伴侶にめぐり逢うまでの恋の遍歴」を描きながら、各人が異なる役割を担い、互いの不安定さを補充し、物語を構成していく。本作品の主題は「三人の貴公子が恋愛・人間関係のトラブルを皇統と摂関家の精神的結びつきにより回避する物語」なのである。

注(1) 田淵福子『恋路ゆかしき大将』の成立(『甲南国文』三一 一九八

四―三)

- (2) 金子武雄『散逸物語『恋路ゆかしき大将』に就きて』(『文学』一九三二―一六) 金子氏は、飛鳥井雅有の日記『嵯峨のかよひ』において阿仏尼を加えた古今伝授、並びに『源氏物語』の講読をする様子が見受けられ、『風葉和歌集』に関わったとされる藤原為家との親交ぶりが明らかに

なった点から、飛鳥井雅有を作者と想定した。

- (3) 宮田光 稲賀敬一「中世王朝物語全集8『恋路ゆかしき大将』『山路の露』」(笠間書院 二〇〇四)
- (4) 上村一実「中世男色と破滅の道―その果てに見えてくるもの―」(『玉藻四』一一―二二 二〇〇八―三)
- (5) 神田龍身『方法としての「男色」―『石清水物語』『いはでしのぶ物語』『風』に紅葉物語―』(『日本文学』三九(二二) 二九―四六 一九九〇 一一二)
- (6) (5)に同じ
- (7) 長谷川政春(『分身』の方位・物語の主人公と語り手たち(『特集』(分身)の構造―古代』(『日本文学』三八(五) 五三―六一 一九八九)
- (8) 辛島正雄「中世物語私注―『いはでしのぶ』『恋路ゆかしき大将』『風に紅葉』をめぐる―」(徳島大学教養部紀要(人文・社会科学)一二 一巻 一九八六―三 (『中世王朝物語史論 下巻』笠間書院 二〇〇一―三に所収)
- (9) 川名淳子『物語絵と雑の相関性―制度化された遊戯―』(『物語世界における絵画的領域―平安文学の表現方法』ブリュッケ 二〇〇五)
- (10) 桜井芳徳『恋路ゆかしき大将』の「雑」と「雑屋」をめぐる―箱庭の中の人形愛―』(『古代中世文学論考刊行会 二〇〇七』)
- (11) (10)に同じ

受贈雑誌(三)

現代日本語研究	高知大國文	國學院雑誌	國學院大学大学院文学研究科論集	國學院大学栃木短期大学日本文学研究	國語学研究	國語國文學報	國語國文研究	國語國文論集	國語国文学	國語と教育	國語と教育	國文學	國文学研究	國文学研究資料館紀要	國文学研究ノート
大阪大学大学院文学研究科日本語学講座現代日本語学研究室	高知大学国語国文学会	北海道教育大学語学文学会	國學院大学	國學院大学大学院文学研究科学生會	國學院大学栃木短期大学日本文学研究所	愛知教育大学国語国文学研究室	北海道大学国文学会	安田女子大学日本文学会	福井大学言語文化学会	大阪教育大学国語教育学会	長崎大学国語国文学会	関西大学国文学会	早稲田大学国文学会	國文学研究資料館	神戸大学「研究ノート」の會